

# 兒童心理學文獻抄 三

牛島義友

九〇

## 親の職業、貧富の影響

### C 親の職業

家庭の職業の如何によつて子供の知能や性質が相違して来る。この事は如何なる理由によるのであらうかは後の問題として事實を少しく述べる事とせやう。

松井詮壽氏（親の職業と其子の知能との關係 教育心理研究第二卷）が東京市の約二千名の小學校六年生に知能検査を施し親の職業別に分類した所、次の様な結果が現はれて居る。之は學校の成績ではなく生來の知能であるから、たゞひその差は小さくとも、注目すべき現象である。

知能指數の平均

専門的職業

一〇四・三

事務的職業

一〇一・二

商業

九八・〇

特殊營業

九五・七

無職

九六・八

技術的職業

九五・六

半技術的職業

九三・四

勞働

八九・八

此中専門的職業（醫者、辯護士、教授等）と勞働者との子弟の知能の相違は非常に著るしいものである。尚以上の職業を頭腦勞働者と筋肉勞働者とに大別して見るに前者は平均九八・八七、後者は平均九二・八三となつて居る。かう云ふ事實はその他の研究にも同様に表はれて居るが家庭的狀況の研究の代表的なものとしてターマンの天才兒に就ての研究を詳細に述べやう。

天才の發生的研究 (L. M. Terman: Genetic studies of Genius, 1925)

彼は知能指數百四十以上の天才兒童一千名に就てその身體、精神、學業成績、家庭狀況等に就て詳細なる調査をなし、而も六ヶ年後に同一兒童が如何に成長し、初めの期待を果しつゝあるかを研究したもので天才研究の權威とされて居るものである。今かゝる天才兒童の家庭狀況に關した點のみを見る。先づ家庭の職業を次の四つに分け天才兒童の家庭の分布狀態と一般職業の分布狀態を較べて見て居る。一般に云ふのは天才兒童を選び出した地方即ちロサンゼルスサンフランシスコ一帯の職業の分布狀態を指すのである。

天才兒童の家庭	一般職業分布狀態
専門的職業	二九・一%
官吏	四・五
商業	四六・二
工業	二〇・二
専門的職業	二九・一%
官吏	四・五
商業	四六・二
工業	二〇・二

専門的職業とは辯護士、技師、教師、醫者、宗教家、藝術家等であつて、一般の分布は非常に少いにも拘らず澤山

の天才兒童を出してゐる。次にこの場合の官公吏とは郵便局員、陸海軍人、巡查、消防、が主であつてまづ下級官吏である。之からは餘り多くの天才兒童は出て居ない併し一般の数も少いのであるから其割合は第二位である。商業は米國の中堅階級を構成する分子であるが此の中からは多くの天才兒童が出て居るが人口の割合から云ふと専門的職業に及ぶべくもない。工業の中には大工、機械師、仕立屋、ペンキ屋、床屋、寫真屋、等が實際に含まれてゐるのであつて、一般職業の過半を占めるものであるが、その中からは割合から云ふと極少數の天才しか出てゐない。次に經濟的狀態を見る爲にその家庭の年收を百七十家族に就て調べた所次の様になつて居た。

年收	家族數
一二・五〇〇弗以上	七
一一・五〇〇	四
一〇・五〇〇	三
九・五〇〇	八
八・五〇〇	二

七・五〇〇	五
六・五〇〇	五
五・五〇〇	十二
四・五〇〇	十五
三・五〇〇	十九
二・五〇〇	三〇
一・五〇〇	五二
五〇〇	八

平均は四七〇〇弗であつて六十名(三五・三%)は年収二五〇〇以下である。この額は當時の北地方に於ける普通の熟練職工の年収に相當するものである。又七・五〇〇弗以上は二十九名(一〇・七%)に過ぎず大部分の者はその中間にあり經濟状態から云ふに中産階級が多い。

次に家庭の狀況が子弟の教育に好ましいかきうかを學校教師に問合せた折、次の様な報告を得て普通の子供に比し天才兒の家庭は恵まれて居る様である。

A、好ましき事情	天才兒の家庭	普通兒の家庭
内	八五・一%	六五・八%

組織的家庭教育	四三・四	三〇・七
善き環境	四一・〇	三〇・四
両親の高等教育	〇・七	〇
その他	〇	〇・六
B、好ましからの事情	八・六	二四・一
内		
溺愛	三・四	四・四
親の死亡	一・二	四・四
離婚	〇・五	〇・六
監督不完全	一・四	三・八
下宿生活	〇・七	三・一
苛酷	〇・二	二・八
その他	一・二	四・九
C、その他	六・二	一四・一

かくの如く天才兒には好ましい條件が多く、好ましくない條件は普通兒より少い。尙又家庭の監督状態を見ても遙かに好ましくなつて居り、その状態を別の立場から點數で示して居るがそれによるに不良兒の家庭が一・八四に對し、普通兒の家庭は三・七、天才兒の家庭は四・六になり、不良

兒を生むか、天才を作るかには親の配慮が非常に關係して來るに云へる。

尙その他ターマンは家庭の教養状態を知る爲に是等天才兒の家庭所藏の書籍數を調べて居るが平均三二八冊で次の様になつて居る。

書籍數	家庭數
〇	七
一〇	一五
二五	四一
五〇	一一九
一〇〇	二二五
五〇〇	一〇六
七五〇	五七
一〇〇〇	四三
二〇〇〇	六

此の數を見るに少數の家庭を除く他は藏書數が案外に少く、百部以下の家庭が多いのに驚く、之は米國にいふ實際的國民の生活を反映してゐるものであらうが、子女の文化的教養の爲には多く讀まらるべきだと思ふ。

以上は天才兒に就ての話であるが低能兒の場合にも同様な事が云はれる。バタソンがミネソタ州の低能兒學校に入學してゐる者(八百二十三名)並びに入學を待つてゐる者五百十二名の親の職業を調べた所知能の高い事を必要とする職業よりも知能を必要としない非熟練工等の家庭から非常に多くの低能兒が出て居る事を知つた。是等の事實は家庭の職業、貧富とその子弟の知能との間に密接な關係のある事を示すが、こゝから直ちに親の職業、階級が知能優劣の原因であるに推論する事は正しくない。むしろ、その反對に知能の低い者は生存競争裡に於て自然下層階級に遂ひやられ、下層階級の者に知能の低い者が集まつて來る。此の低い知能が子供に遺傳されて來たを考へられる。

併し斯る一般的關係の他に親が職を失ふといふ様な事に遭遇するに子供は精神的に非常に大きな衝撃を受け、學校成績等はその爲に急に悪くなる事がある。ブーゼマン及びバールの研究によるに失業者の子弟と非失業者の子弟との學業成績を較べた所、前者の平均點三・一五であるに對し後者の平均點は二・八〇であつた。(但しこの點數は一點より

五點までで、一點が最高で數の多くなる程成績の悪くなる事を意味する。即ち失業者の子弟は非失業者の子弟より明らかに劣つてゐる。而るに是等失業者の子弟にいへば、親の失業前は平均二・八一點を得てゐた。之で見ると親の失業が明白に學業成績を低下させた事が分る。

以上は主として知能に關係して述べたが、知能即ち生來的素質ですらもこの様に家庭の状況により影響されるが性格の方は一層多く家庭の状況に支配される。之に就ては一論述するまでもなく吾々の日常見聞して居る事實であつて子弟の教育には健全なる家庭が絶対に必要である。

不良兒の發生する原因として家庭的環境を考へて見るに普通兩親の有無が問題とされて居るが、眞に大切な事は何歳位の時に親と別れたか云ふ事である。最近の調査によると三歳以前で親を失つた者が不良兒の中の親無し子の三割を占めてゐる事が明白になつた。即ち、親に早く別れる程不良化する割合が多くなる事が判る。又親の無智、無能、疾病、或は父の不在勝ち、母の職業等の爲に家庭の監督不行届が不良化の原因となつたり、兩親の極端な無頓着が災

ひする事が多い。ウィリアムスはオハイオ州の少年審判所にて扱つた四千の事例の中から不良化の原因を二百程數へて居るが、その中でも重要なものは監督訓練の不足、惡友、怠惰、家庭の不和、家庭に於ける道德標準の低い事、等であつて、身體的條件とか遺傳、疾病等よりも遙かに重要になつて居る。

又不良化の原因としては貧困といふ事が中々重大な問題である。浪速少年院兒に就て調べた所によると、月收五拾圓以下の者が

月 收

五拾圓以下

五一・九%

百五拾圓迄

三四・九%

百五拾圓以上

一三・一%

大半を占めてゐるのに驚く。上層階級から不良兒の出る事も屢々耳にするが之は特殊なセンセーショナルな出來事であるので新聞紙上に大きく報導されるのだが、不良兒の實際の大部分は細民階級から出るものである。又東京府兒童研究所に於て扱つた不良兒の家屋の (以下一二頁へ)

うにピンミ長くしてしまつたさいふのだ。だが、さうでもない、貴様達は、サアサ起きろ、起きろ。』

そんな風にして、牢屋の囚人達にはまたしてもいつもの定まりきつた一日がはじまりました。だが何一つ變つたところがないさいふわけではありませんでした。あの水差しの腐つたやうな水がいつもく上等の葡萄酒のやうな味が致しました。微<sup>かひ</sup>だらけのあのバンが、みんなの口に入るか入らないかに、すつかり何とも言へない美味しいバンに變つてしまひます。そして時々思ひだしたやうに、牢屋の中を美しい花片が一片二片風に乗つて舞ひ降りて参ります。夜は夜で、みんなが寝る時になるまで、汚いベットがすつかり眞白なシートで包まれてしまひます。毎晩、毎晩、靜かな靜かな眠りが牢屋にソツミ降りて来て、苦しみも悩みもない平和を持つて来てくれました。

(つゞく)

(九八頁より)  
疊数は中數九・六疊さいふ貧弱な數であつて、此の狭い家屋の中に多數雜居せねばならぬさいふ境遇から不良傾向が醸し出されて來るのである。

以上家庭の職業並びに經濟的關係が子供の知能、性格に影響する事實を述べたが、その他家庭の影響として親の精神的感化さいふものを忘れてはならぬ。今之に就て述べる餘裕はなくなつたが精神的に優れた親の感化さいふものは上述の物質的、社會的な不備を補つて餘りあるものであつてこの點を没却して物質的な環境の改善のみを考慮するが如き政策は眞の教育に云ふ事は出來ないのである。此の親の精神的感化、即ち健全なる家庭を第一義として更にそれを補ひ、子供をより幸福に導く手段として家庭的環境の改善を企圖して行かねばならない。

大阪毎日新聞が此の正月、この世の世紀といふ大見出しで、「世界幼稚園巡り」を連載してゐるのは嬉しい。それもニューヨーク、パリ、モスクワといつた風に、各地の特派員の筆になつてゐることは、記事としての價値を高めてゐると共に、此のテーマが大阪本社編輯局で特に選ばれたものであることなうかやはじめて尙ほ嬉しい。幼稚園のことが斯うした記事として大新聞で取扱はれることは、幼稚園の教育的意義と共に社會的意義の普遍的認識が加はつたことを立證するもので、此の上もなく嬉しい。殊にその一つ一つの寫眞が流石にそれだけの幼稚園のランドコロを捕へてゐるのも嬉しい。さて「世界幼稚園巡り」であるからには我國のものも入れられる筈と思ふが……それはこの特派員を煩はしたらいだらう。(S.K.)